

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

シャンカラの世界征服 : Sa?karadigvijaya 第1章 訳注

著者	堀田 和義
雑誌名	人間学研究論集
号	7
ページ	29-40
発行年	2018-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000758/

シャンカラの世界征服

— Śaṅkaradigvijaya 第1章訳注 —

堀 田 和 義

はじめに

本稿はヴェーダーンタ学派アドヴァイタ派の祖であるシャンカラの伝記『シャンカラの世界征服 (Śaṅkaradigvijaya)』第1章の訳注である¹。シャンカラ伝は数多くあるが²、『シャンカラの世界征服』はシュリンゲリー僧院が認める最も権威あるシャンカラ伝とされ、マーダヴァ (Mādhava, 14世紀)の著作とされる。マーダヴァは出家後の名前をヴィディヤーラニヤ (Vidyāraṇya) といい、シュリンゲリー僧院の第12代世師であった。本作の他にも、*Jīvanmuktiviveka*, *Pañcadaśī*, *Vivaraṇaprameyasamgraha*, *Sarvadarśanasamgraha* 等々、少なくとも14の著作が彼に帰せられている³。ただし、『シャンカラの世界征服』がこのマーダヴァの手になるものであるという点は、多くの研究者によって疑問視されており、実際には18世紀に成立したと考えられている⁴。

翻訳に際しては、*Śrīvidyāraṇyaviracitaḥ Śrīmacchaṅkaradigvijayaḥ*, Ed. Mahādeva Cimaṇājī Āpate, Ānandāśramasamskṛtagranthāvali no.22, Pune: Ānandāśrama Press, 1891 を底本とし、底本に含まれる2種類のサンスクリット語注 (Acyuta の *Advaitarājyalakṣmī*、および Dhanapatisūri の *Ḍiṇḍima*) を参考にした。『シャンカラの世界征服』の作者は、謙虚な言葉を混ぜながらも「新たなカーリダーサ (navakālidāsa、現代のカーリダーサ)⁵」を自負しており、その文章には難解な箇所も多いため、これらのサンスクリット語注なしでの読解は不可能であった。

他にも、入手することのできた以下のヒンディー語訳 (ヒンディー語注を含む) 2種類を参照した。

- ・ *Śrīśaṅkaradigvijaya*, Ed. Baladeva Upādhyāya, Śrī Śravaṇanātha Jñānamandira Granthamālā no.1, Haradvāra: Mahanta Mahādevanātha, vi*saṃ*2024.
- ・ *Śrīvidyāraṇyaviracitaḥ Śrīśaṅkaradigvijayaḥ*, Ed. Śivaprasāda Dvivedī, Vidyābhavana Prācyavidyā Granthamālā no.249, Vārāṇasī: Caukhambā Vidyābhavana, 2012.

これらのヒンディー語訳、およびヒンディー語注はいずれも上記のサンスクリット語注にもとづいた解釈をしており、非常に優れた翻訳である。英訳は2種類入手できたが⁶、正確さという点では上記のヒンディー語訳に比べて劣ると思われる。

本稿も、読解、日本語としての読みやすさ等々に関して、まだまだ改善の余地は多いと思われるが、ヒンディー語以外の現代語への翻訳が非常に少ない現況に鑑みれば、多少は価値があるも

のと信じる。誤りに関しては、諸賢のご教示を乞う次第である。

〈凡例〉

- ・一文が長くなりすぎないように、文を適宜切ったり、順序を入れ替えるなどした。ただし、内容には影響しないように配慮したつもりである。
- ・サンスクリット語文献に頻出する epithet 等を用いた多様な表現は、翻訳を読む際には文脈の理解を妨げることも多いため、代表的な名前（例えば、シヴァ、ヴィシュヌ、クマーリラ等）で訳出するようにした。ただしインド古典においては大きな意味のあるものであることに鑑みて、脚注に epithet 等の日本語訳と原語を注記するようにした。
- ・いわゆる epithet でなく、一般的な形容詞で登場人物が示されている場合も、指示対象を明確にするために、それに代表的な名前を付け加える形で訳出するようにした。
例 「偉大な～」という形容詞 → 「偉大なクマーリラ」
「悪しき～」という形容詞 → 「悪しき仏教徒」
- ・指示代名詞なども、なるべくその指示対象である固有名詞等で訳すようにした。同様に、「王」などの語も、その指示対象である固有名詞を加えて訳すようにした。
例 「王」 → 「スダンヴァー王」
- ・それ以外の訳者による補いは〔 〕を用いた。

第1章

- 1.1 尊敬すべきヴィディヤーティールタ⁷の姿をとった最高のアートマンに敬礼し、古の『シャンカラの勝利』⁸の精髓を分かりやすくまとめよう。
- 1.2 たとえ小さな鏡でも膨大な量の水瓶を映すことはよく知られている。同様に、簡潔にまとめた私のこの作品の中にも、シャンカラに従う者たちの言葉の精髓をどうか見出していただきたい。
- 1.3 非常に美味な甘い物であっても、風味を出すために別の美味な物と合わせることは適切である。同様に、私によるこの韻文の配列の様式も、古の詩人の魅力的な韻文⁹に「風味を出すために」どうか認めていただきたい。
- 1.4 古の詩人たちによってすでに適切に称えられているけれども、シャンカラ¹⁰が私の作品によっても満足してくれますように。乳海に住んでいるからといって、ヴィシュヌ¹¹が牛の群れの中でさらに乳を求めないということがあるだろうか¹²。
- 1.5 安楽をもたらすがゆえに「シャンカラ¹³」という優れた名を持つ世界の師の名誉は、乳海の裂け目から大量に流れ出た甘露のせせらぎの甘みの中でも最も甘い言葉によって、シェー

シャ¹⁴をも凌ぎ、心を浄化する。私は主としてそれを語ろうと望んでいる。

- 1.6 かたや、シャンカラという良き師のこの美質の集まりは、諸方位の堤防を破壊し¹⁵、相応しい季節に花開いたマーラティーの芳香の驕りを減ぼすものであり、かたや、私のごとき者である。ああ、それでも、良き師¹⁶の憐れみという甘露の流れに沈んでは浮かび上がる流し目的になることで、私には称賛される価値がある。
- 1.7 私の言葉は、自らを幸運だと思い込んでいる者、識別を欠いている者、自らを善人だと思い込んでいる者、ラクシュミー¹⁷という踊り子の踊りに酔い痴れた最底辺の人間たちの言説との擦れ合いという汚泥に塗れている。今日、私はそれをシャンカラ師の遊戯により生じる名誉という海から流れ出る水流により、しっかりと洗い流そう。
- 1.8 卑しい王¹⁸たちの寛容さや勇敢さ、気高さ、憐れみなどは、石女の息子や驢馬の角のようなものであり¹⁹、私の言葉にはそれらを描写する技術という悪臭が染みついている。自制者シャンカラの名声は、あたかも三界という舞台の上で踊る踊り子のようなものである。大地に飛び散った、その踊り子の大量の梅檀の粉によって、私の言葉に芳香をつけよう。
- 1.9 新たなカーリダーサの一連の詩というサンターナカが²⁰、今日、賢者たちに努めて絶えない喜びをもたらしますように。この繁茂した如意樹は、シヴァ²¹の憐れみの化身である尊敬すべき師シャンカラを、愛情の堅固さにより正しく敬うのに相応しい、甘い言葉という花房をつけている。
- 1.10 新たなカーリダーサである賢者のこの言葉は、芳香を放つ麝香も喜び、梅檀も歓喜し、マンダーラ²²も好ましい言葉で歓喜し、サフラン²³も満開となっている。欠陥のないこの言葉が、無慈悲な悪しき詩人たちにより、歪められることがあるかもしれない。あたかも、夜間に放たれた²⁴牝牛が野蛮人たちによってされたように。
- 1.11 あるいは、良き人々は方々にいる。彼らは苦しんでいる者に慈悲深く、心優しく、その心は親切さから成る川²⁵で揺れ動くという遊戯だけを楽しみ、他者の言葉を真珠のように好む。際限なく心配して何になろうか。あるいは、憐れみの海である、最高の師シャンカラが満足してくれる。
- 1.12 シャンカラ師の美質を称えようとして、詩節の半分で挫折した者たちもいれば、その4分の1を書いたところで挫折した者たちもいる。ああ、私はそのような美質を称えることを求めているが、月²⁶を両手で取ろうとする者たちの無謀さは弁えているつもりだ。
- 1.13 たとえそのようであっても、乳海の広大な流れの、輝く大波の連なりが戯れるのを楽しむことだけに喜びを見出す、修行者の主²⁷のこの流し目は、私に対して見開かれている。これらは口がきけない者たちをも饒舌にする力があるので、不可能な望みを叶えることにも優れて力があることに何の不思議があろうか。
- 1.14 不二一元論派の尊い師を称えることで積んだ善業により気高いサラスヴァティー²⁸が、自らの気高い弁舌の流れを、私の舌先という獅子座へと近付けてくれますように。踊るシヴァ²⁹の高い冠の縁の湾曲からは〔ガンジス〕川が流れ出ており、その川の波の激しい轟音の驕りの大波を打ち砕く賢明さゆえに、サラスヴァティーの弁舌の流れは心に適うものである。
- 1.15 「かたや、シャンカラという良き師の行いはこのように優れており、かたや、私は卑しい者である。あなたは、長い間に培った私の名誉を、どうして失わせようとするのか。なぜ海に

沈めようとするのか。」このように言って震えながら逃げる言葉を詩人たちが力づくで引き戻し、美質を称賛するように命じるとは、師の尊さは驚くべきものである。

1. 16 粗い単音節の言葉で辞書を必要とするもの、概して un を始めとするもの〔と呼ばれる接辞のグループ〕で言及される接辞から構成されるもの、yañ〔という接辞〕で終わる非常に不均等なもの、理解しがたく繋がり悪いものといった、辛うじて寄せ集めたいいくつかの語によって、ああ、私の言葉は邪悪な詩人たちに支配されてしまうだろう。それはあたかも、鹿がキラータたちによって支配されてしまったようなものである。
1. 17 この詩では「尊いお方」という名のシヴァ³⁰が主人公として登場し、恋情などとともに寂靜の情調が主要なものとして現れ、無明を滅ぼすことも果報である。その詩の作者である、ヴィヤーサのように不動の、最高の詩人は幸いであり、その者の努力を知る者たちも幸いである。
1. 18 その詩のうち、第1章には序論が、第2章にはシヴァの出現が〔含まれる〕。第3章では、それぞれの神³¹の降臨が描かれる。
1. 19 第4章には、シャンカラの清浄な8年目までの行跡が含まれ、第5章では、彼に相応しい安楽のための生活の場の獲得が描かれる³²。
1. 20 第6章では、長い時間にわたり、伝統によって伝えられてきたかの清浄なアートマンに関する知識が確立される。
1. 21-23 第7章には、シャンカラとヴィヤーサ師の会見という驚くべきことが、第8章には、マンダナと尊いシャンカラの対話が含まれる。第9章では、聖者が弁舌〔の神〕サラスヴァティーを目の当たりにして一切知者となるための手段の考察が、第10章では、ヨーガの力により〔アマラカという名の〕王の身体に入ってカーマ³³の技法を身に付けた後に、その技法を用いる様が明らかにされる。第11章には、ウグラバイラヴァという名の者に対する勝利が含まれる。
1. 24 第12章には、ハスタダートゥリとアーリヤトータカという両者の帰依が、第13章には、ヴァールティカをもって終わるブラフマンに関する知識の普及が含まれている。
1. 25 第14章では、パドマパーダの聖地巡礼が描かれ、第15章では、シャンカラの世界征服という興味をそそる事柄が語られる。
1. 26 第16章には、偉大なシャンカラのシャーラダー寺院における滞在が含まれる。以上の16の章によってシャンカラの物語が説かれる。
1. 27 この物語はカリ・ユガの汚れを滅ぼし、一度聞いただけでも望みを叶え、様々な問答により魅力的なものであり、賢者たちの喜びのために開始される。
1. 28 ある時、神々がカイラーサ山³⁴に住むシヴァ³⁵に近付いた。その神はというと、あたかもウダヤ山³⁶に昇った月³⁷のようであった。
1. 29 彼らは恩寵により自分の目的の成就を認められるとシヴァに敬礼し、蓮³⁸のような手を蕾のように合わせて恭しく告げた。
1. 30 「尊い方よ、我々のために、ヴィシュヌ³⁹がブッダの身体を備えて仏教徒たちを欺いているのはご存知のことと思います⁴⁰。
1. 31 〔それでも〕主よ、今や、ブッダが著した聖典に依拠し、〔正統派〕学説を批判する仏教徒たちによって、大地が覆い尽くされています。それはあたかも、夜が濃い闇によって覆い尽くされているかのようです。

1. 32 主よ、彼らは神聖なものを憎み、身分や生き方にもとづく正しい行いを憎んでいます。そして、ヴェーダの言葉を生計を立てる手段にすぎないなどと言っています。
1. 33 いかなる人も、薄明時の祈禱などといった行為や遊行を決して実践しません。すべての人が異端者になってしまいました。
1. 34 “kratu（祭式）”という2音節を聞いても、人々は両耳を塞いでしまいます。どうして祭式を促すことができますでしょうか。どうして私たちが祭式を享受できますでしょうか。
1. 35 シヴァやヴィシュヌの聖典に専心し、リングや円盤などの印をつけた異端者たちが祭式を放棄しています。それはあたかも、悪人が憐れみを放棄するかのようです。
1. 36 心を他に向けることなく至上のプルシャへと向かう優れた天啓聖典が、驕りに酔い痴れた仏教徒たちによって非難されていないと言えましょうか⁴¹。
1. 37 今日、切断されたバラモンの蓮のごとき頭によってパイラヴァを崇拝する、カーパーリカの中でも最低の者たちにより、世間の規範が破壊されていないと言えましょうか。
1. 38 大地には他にも荊の生えた道がたくさんあります。人々がそこに足を踏み入れると、絶え間ない苦しみを得るような道です。
1. 39 それゆえに、あなたは世の人々を守るためにすべての悪を滅ぼし、世の人々が幸せになれるような、天啓聖典にもとづく道を確立して下さい。」
1. 40 このように言って黙った神々に、シヴァ⁴²は言った。「人間の姿をとって、あなた方の願いを叶えよう。
1. 41-44 行いの悪い者を滅ぼすために、そして法を正しく確立するために、『ブラフマ・スートラ』の趣意を確定する注釈を著し、ヴィシュヌ⁴³が4本の腕を持っているように、無知を原因とする二元という闇を滅ぼすための真昼の太陽である4人の優れた弟子たち⁴⁴とともに、シャンカラという名の、修行者たちの王として地上に生まれよう。私と同様にあなた方も人間の姿をとり、神々⁴⁵がみなその私に従うならば、あなた方の望みは疑いなく叶うだろう。」
1. 45 このように神々⁴⁶に言うと、シヴァは他の者には得難い流し目を息子のスカンダに送った。それはあたかも、太陽が蓮⁴⁷に光線を送ったかのようであった。
1. 46 乳海の波のようなその流し目を受けて、スカンダ⁴⁸は喜んだ。それはあたかも、海⁴⁹が月光を浴びて喜んだかのようであった。
1. 47 齒という月の光によって神々というチャコーラ鳥⁵⁰を喜ばせるシヴァ⁵¹は、賢明な息子スカンダに言った。
1. 48 「愛児よ、世の人々を救うための優れた言葉を聞きなさい。3つの部門から成るヴェーダ⁵²を救い出せば、バラモンが救われるであろう。
1. 49-50 バラモンが守られれば、全大地が守られるであろう。というのも、^{ヴァルナ アーシュラマ}身分と生き方の存続は彼らにかかっているからである。それゆえに、今やバラモンを救うべきである。このように考える私の深い意図を知って、かつてヴィシュヌとシェーシャは私のもとへやって来た。
1. 51-53 ヴィシュヌとシェーシャは中間の部門を救うことを私に認められると、部分的に大地に降臨してサンカルシャナ⁵³とパタンジャリ⁵⁴という聖者になり、念想に関する部門とヨーガに関する部門を喜んで作った。「最後の知識の部門は私が救おう」と、たった今、神々に約束したのは、お前も知っているはずだ。お前はジャイミニの道という海を照らす秋の満月となり

なさい。

1. 54 神聖なもののために、お前は優れた行為に関する部門を救いなさい。そうすれば、以後、「スブラフマンヤ（バラモンに親切な者）」と呼ばれるだろう。
1. 55 大地に降臨し、ヴェーダの趣意を妨げる仏教徒をすべて征服し、ヴェーダにもとづく規範を確立しなさい。
1. 56 お前を助けるために、ブラフマンもマンダナという名のバラモン⁵⁵となり、偉大なるインドラもスダンヴァーという名の王⁵⁶となるだろう。」
1. 57 「承知しました」と言って、スカンダ⁵⁷は、創造主ブラフマンをも動かす、シヴァ⁵⁸の甘露の流れのような言葉を受け入れた。
1. 58 するとインドラは〔スダンヴァー〕王⁵⁹になり、法にもとづいて人民を守護し、大地を天界のように、自分の都をアマラーヴァティー⁶⁰のようにした。
1. 59 一切知者でありながらも、悪しき仏教徒たちの教典に偽りの信仰を抱いたスダンヴァー王は、スカンダ⁶¹を待ちながら、仏教徒たちを一箇所に集めた。
1. 60 そして、かのスカンダ⁶²は〔クマーリラとして〕地上に生まれた。彼の「バッタ・パーダ」という名前は、方位という美女⁶³の装飾となった⁶⁴。
1. 61 クマーリラはジャイミニがスートラによって示したヴェーダの趣意を明らかにして、輝きを放った。それはあたかも、暁によって顕現した世界を太陽⁶⁵が照らし出しているかのようであった。
1. 62 クマーリラは諸方位を征服しながら、スダンヴァー王の都にたどり着いた。王⁶⁶も出迎えて、作法に従って彼に敬意を表した。
1. 63 クマーリラは祝福によって王⁶⁷を喜ばせると、黄金の座に座ってその集会場を輝かせた。それはあたかも、芳香が天界の森を輝かせたかのようであった。
1. 64 集会場のそばにある木に止まったコーキラ鳥の鳴き声を聞くと、賢者の中の最上者クマーリラはそれを真似て王に言った。
1. 65 「ピカ鳥⁶⁸よ、もしあなたが黒く、卑しく、耳を汚す声をしたカラスの群れと付き合わないならば、称賛されるでしょう⁶⁹。」
1. 66 仏教徒⁷⁰たちは核心を突いたこの言葉を聞くと、足で触れられた蛇のように激しく怒った。
1. 67 クマーリラは論理という斧でブッダの定説という木⁷¹を切り、集められたブッダの書物という燃料で〔仏教徒の〕怒りという炎を増大させた。
1. 68 その集会場は、怒りで薄紅色に輝く仏教徒たちの顔によって光を放った。それはあたかも、朝の太陽光によって赤みがかった蓮⁷²が、湖で光を放ったかのようであった。
1. 69 彼らが非難の言葉を述べ、互いに論駁し合っていると、ラサータラ界⁷³を打ち破るかのような大音が生じた。
1. 70 クマーリラ⁷⁴の提示した堅固な論理によって主張⁷⁵を論駁されたブッダ⁷⁶は直ちに地に落ちた。それはあたかも、インドラの大きな剣（＝ヴァジュラ）によって羽を傷付けられた山⁷⁷が落下したかのようであった⁷⁸。
1. 71 賢明なクマーリラは敵である仏教徒たちの「一切知者」という語に耐えられないかのようにであり、彼らを絵に描かれた者のように沈黙させた。

1. 72 そして、仏教徒たちの驕りを減ぼすと、クマーリラはスタンヴァー王⁷⁹にヴェーダの言葉を教えながら、何度も讃えた。
1. 73 するとスタンヴァー王⁸⁰は言った。「勝敗は呪術的な力にかかっている。山頂から飛び降りても死なない者の見解が確かなものである。」
1. 74 それを聞くと、仏教徒たちは互いに顔を見合わせた。一方、バラモンの中の最上者クマーリラはヴェーダを念じながら、山頂に登った。
1. 75 「もしヴェーダが確かなものであるならば、私は決して死なないはずだ。」このように叫びながら、非常に偉大なクマーリラはそこから飛び降りた。
1. 76 [クマーリラが山から飛び降りるのを見て]「外孫によって善業を与えられたにもかかわらずそれを減ぼして、ヤヤーティが再び天界から落ちてきたのだろうか⁸¹」と人々は言った。
1. 77 世人の師クマーリラは岩山から綿の塊のように落ちた。天啓聖典が自分に帰依する者たちの災難を取り除かないことがあろうか。
1. 78 その驚くべき行為を耳にして、バラモンたちが諸方から集まってきた。それはあたかも、雷⁸²を耳にして、孔雀⁸³たちが茂みから集まってきたかのようにであった。
1. 79 クマーリラが無傷であるのを見ると、王は天啓聖典を信仰した。そして、悪しき仏教徒たちとの交際によって汚れた自分を何度も責めた。
1. 80 一方、仏教徒たちは「このことは見解を確定する根拠にはならない。宝石、マントラ、薬草によっても⁸⁴、このように身体を守ることができる」と言った。
1. 81 事実を目の当たりにしたにもかかわらず卑劣な仏教徒たちがそれを捻じ曲げると、王は眉を顰めて恐ろしい顔をして、非常に残酷なことを約束した。
1. 82 「私はあなた方にあることを尋ねよう。そして答えることができない者たち全員を圧搾機の上で疑いなく殺してやる。」
1. 83 このように約束すると、王⁸⁵は毒蛇の入った水瓶を持ってきて、バラモンと仏教徒に「この中には何が入っているか」と尋ねた。
1. 84 バラモン⁸⁶と仏教徒は「王様⁸⁷、我々は明朝その結論を述べましょう」と言って王を喜ばせると、立ち去った。
1. 85 バラモン⁸⁸は、あたかも蓮のように喉の深さまで水に入り、太陽⁸⁹に向かって苦行を行じた。すると太陽も姿を現した。
1. 86 言うべきことの一部を示して太陽が姿を消すと、バラモンたちがやって来た。仏教徒たちも水瓶の中にあるものを確定してやって来た。
1. 87 するとその仏教徒たちはみな「蛇⁹⁰が入っている」と答えた。バラモン⁹¹たちは「シェーシャ⁹²の身体の上に横たわるヴィシュヌ⁹³が入っている」と答えた。
1. 88 バラモン⁹⁴たちの言葉を聞くと、王⁹⁵の顔は池が干上がって萎れた蓮の色になった。
1. 89 すると身体を持たない天の声が、王と聴衆全員の疑惑を打ち消しつつ王に言った。
1. 90 「大王よ、バラモンの言ったことは真実に他ならない。それを疑ってはならない。約束に忠実であれ。」
1. 91 王⁹⁶は身体を持たない声を聞いた後、水瓶の中にヴィシュヌ⁹⁷の像を見た。それはあたかも、インドラ⁹⁸が水瓶の中に甘露を見たかのようにであった。

1. 92 入れたのとは別の物を見たためにあらゆる疑惑がなくなると、王は天啓聖典を憎む仏教徒たちを殺すよう命じた。
1. 93 「〔私の臣下で〕ラーメーシュヴァラ⁹⁹からヒマーラヤ¹⁰⁰の間にいる老人、子供に至るまでの仏教徒を殺さない者は殺してやる」と王は臣下に命令した。
1. 94 たとえ望ましい者であっても過失が見られたならば、偉大な者たちにとっては殺すに値する。母親だからといって、パラシュラーマ¹⁰¹が現に殺さなかっただろうか¹⁰²。
1. 95 法を憎む^{ダルマ}仏教徒たち¹⁰³は、クマーリラ¹⁰⁴に従う王によって殺された。それはあたかも、ヨーガを減ぼす障害が、真実に専心するヨーガ行者たちの王によって減ぼされたかのようであった。
1. 96 悪しき仏教徒たちが殺されると、賢者クマーリラは天啓聖典にもとづく道を広めた。それはあたかも、闇が減ぼされて、太陽が光を広めたかのようであった。
1. 97 クマーリラという獅子¹⁰⁵によってブツタ¹⁰⁶という象が殺されると、天啓聖典という枝は、妨げられることなくあらゆる方向に向かって伸びた。
1. 98 このように、まずスカンダ¹⁰⁷〔の化身である〕一切知者クマーリラによって、この行為の道が切り開かれた。すると憐れみの海であるシヴァ¹⁰⁸が生存の海に沈んだこの生類を救おうと望んだ。

尊敬すべきマーダヴァの『シャンカラの勝利』集成の導入物語を説く第1章終わり。

注

- 1 各章末尾のコロフォンに見られる作品名は *Samkṣepaśaṅkarajaya* であるが、本稿においては一般によく知られた *Śaṅkaradigvijaya* を用いる。
- 2 前田 1980, p.69 を参照。
- 3 前田 1980, p.47 以下を参照。
- 4 この問題については、澤井 2016, p.76 以下を参照。
- 5 本訳注 1.9-10 を参照。
- 6 入手できた英訳は、以下の2種類である。
 - ・ *Sankara-dig-vijaya—The Traditional Life of Sri Sankaracharya*, Tr. Swami Tapasyananda, Madras: Sri Ramakrishna Math (出版年不明)。
 - ・ *Srimad Sankara Digvijayam by Vidyaranya* (2vols.), Tr. K. Padmanabhan, Madras, 1985 (出版社不明)。その他にも、Bader 2000 によれば、第1章に関しては、Paul Deussen によるドイツ語訳 (*Allgemeine Geschichte der Philosophie* I 3, pp.181-189. Leipzig: F. A Brockhaus, 1908. 筆者未見) がある。
- 7 ヴィディヤーティールタ (Vidyāūrtha) は、シュリンゲリ僧院の第10代世師であった人物であり、本書の著者とされるヴィディヤーラニヤ (Vidyāranya) の師にあたる。この人物の名前はヴィディヤーラニヤの他の著作にも見られる。例えば、*Jīvanmuktiviveka* の冒頭では、次のように述べられている。yasya niḥśvasitaṃ vedā yo vedebhyo 'khiḷaṃ jagat/ nirmame tam ahaṃ vande vidyāūrthamaheśvaram//*Jīvanmuktiviveka* 1 (Ed. Mahāprabhuḷālagosvāmin, Kāśī Saṃskṛta Granthamālā no.39, Vārāṇasī: Caukhambhā Saṃskṛta Saṃsthāna, 1984.)
- 8 Acyuta の *Advaitarājyalakṣmī* などは、この“Prācīna-Śaṅkarajaya”という語は Anantānandagiri (13世紀頃) の作品を指すと考える (ただし、現行版本では、*Śaṅkaravijaya* となっている。例えば、以下の刊本を参照。*Śaṅkara-Vijaya*, Ed. Jayanārāyaṇa Tarkapañcānana, Bibliotheca Indica nos.46, 137 and 138, Calcutta: Asiatic Society of Bengal.)。しかし、実際には、*Śaṅkaradigvijaya* は Vyāsācala の *Śaṅkaravijaya*、Tirumala-Dīkṣita の *Śaṅkarābhyudaya*、Rājacūdāmaṇi-Dīkṣita の *Śaṅkarābhyudaya*、Rāmabhadra-Dīkṣita の *Patañjalicarita*、

Anantānandagiri の *Śaṅkaravijaya* といった先行する様々な作品の詩節を集め、それらを巧みに組み合わせで構成されている。Bader 2000 は、他の作品に比べて Anantānandagiri の *Śaṅkaravijaya* の詩節の数が少ない点を踏まえて、最も多く借用された Vyāsācala の *Śaṅkaravijaya* を指すと考えの方が妥当であるという見方や、先行するシャンカラの伝記をまとめて “Essential Śaṅkara-vijaya” を作ったという見方を提示している。これらの点については、Bader 2000, p.53 以下を参照。 *Śaṅkaradigvijaya* が借用した詩節の出典については、Bader 2000, Appendix C に詳しい。また、Appendix B では “Prācīna-Śaṅkarajaya” という語が失われた作品を指すと考えの先行研究についても詳細に検討している。

- 9 注 8 を参照。
- 10 注釈作者 (bhāṣyakāra)
- 11 湖に生えるもの (=蓮) のような目を持つ者 (sarasīruhākṣa)
- 12 一般的にヴィシュヌ神の化身のひとつとされるクリシュナには、牛飼い女たちとの恋愛に関する物語が見られ、そのことを踏まえた表現。
- 13 「シャンカラ (śaṅkara)」は「幸福をもたらす者」を意味し、「安楽をもたらす者 (śivaṃkara)」と同義語なので、このように言われる。
- 14 蛇たちの王 (phaṇādhārādhiśītr)
- 15 妨げられることなく、あらゆる方位に広がるということ。
- 16 作者自身の師、もしくはシャンカラを指すと考えられる。
- 17 海の乙女 (abdhikanyā)
- 18 大地の主 (kṣitīndra)
- 19 石女の息子や驢馬の角、その他にも兎の角や亀の毛などといったものは、実在しないものの喩えとしてしばしば挙げられる。
- 20 望みの物をもたらす力を持った木 (如意樹) の 1 種。神々の世界には、マNDERーラ (Mandāra)、パーリジャータ (Pārijāta)、サンターナ (Santāna)、カルパヴリクシャ (Kalpavṛkṣa)、ハリチャンダナ (Haricandana) という 5 つの如意樹があるとされる。これについては、Mani 1975 の Kalpavṛkṣa の項目等を参照。
- 21 甘露を光線とするもの (=月) の一部を飾りとする者 (pīyūṣadyutikhaṇḍamaṇḍana)
- 22 如意樹の 1 種。注 20 を参照。
- 23 カシュミール産のもの (kāśmīrajā)
- 24 “doṣojjhita” という語は、「欠陥のない」と「夜間に放たれた」という二重の意味で用いられている。
- 25 波立つもの (kallolinī)
- 26 冷たい光線を持つもの (śītakiraṇa)
- 27 作者自身の師、もしくはシャンカラを指すと考えられる。
- 28 シャーラーダー (楽器の一種) を持つ母 (śārādāmbā)
- 29 死を克服した者 (mr̥tyumjaya)
- 30 偉大なる主 (maheśa)
- 31 甘露を食べ物とする者 (amṛtāndhas)
- 32 サンスクリット語注は「彼に相応しい安楽」を生前解脱 (jīvanmukti) と解し、そのための生き方 (āśrama、本来の意味は「努力の場」) を、いわゆる四住期説で言うところの第 4 段階、すなわち遊行期 (parivrājaka, bhikṣu 等) と解する。ただし、シャンカラの生涯の場合は、『マヌ法典』のような段階説ではなく、dharmaśūtra に見られるような選択説と言える。dharmaśūtra における āśrama に関しては、渡瀬 1981 等を参照。
- 33 魚の旗を持つ者 (mīnadhvajā)
- 34 美しい山 (rūpyācala)
- 35 神々の中の神 (devadeva)
- 36 東方の山 (pūrvācala)
- 37 冷たい光線を持つもの (tuṣārāṃśu)
- 38 水から生じるもの (abja)
- 39 人々を興奮させる者 (janārdana)

- 40 ヒンドゥー教においてブッダはヴィシュヌの化身のひとつとされ、そのことを踏まえている。
- 41 この文には「一途に最高の男性に従う淑女が、驕りに酔い痴れた者たちに汚される」というもう一つの意味がある。
- 42 山の娘に愛される者 (giriḥpriya)
- 43 ハリ (hari)
- 44 4人の弟子というのは、スレーシュヴァラ (Sureśvara)、パドマバーダ (Padmapāda)、ハスターマラカ (Hastāmaraka)、トータカ (Toṭaka) の4人を指す。
- 45 第3の天界に住む者 (tridivavāsin)
- 46 天界に住む者 (diviṣad)
- 47 泥から生じるもの (pañkaja)
- 48 秘密の場所で育てられた者 (guha)
- 49 水に満ちたもの (udanvat)
- 50 インドにおいて、チャコーラ鳥 (ヤマウズラ) は月光を飲むと考えられている。
- 51 頭に月を戴く者 (candraśekhara)
- 52 3つの部門とは、1.51-54で述べられるように最初の行為に関する部門、中間の念想に関する部門とヨーガに関する部門、最後の認識の部門という3つを指す。このような三分法については、金沢 1986, pp.23-24、および n.79 を参照。ただし、ヨーガに関する部門を含める用例は見当たらないようである。
- 53 サンカルシャナ (Saṅkarṣaṇa) が普通名詞であるのか人名であるのか等々は不明であるが、ここでは間違いなく人名として用いられている。また、Upāsanākhāṇḍa の作者についても諸説あるが、ここではサンカルシャナを作者としている。この問題の詳細については、金沢 1986 を参照。
- 54 『ヨーガ・スートラ』の作者とされるパタンジャリを指す。
- 55 大地の神 (bhūśura)
- 56 大地の守護者 (bhūmipa)
- 57 神々の軍隊の主 (budhāṇīkapati)
- 58 主 (prabhu)
- 59 人々の主 (nṛpati)
- 60 神々の王であるインドラが住む都の名前。
- 61 クラウンチャ山の敵 (krauñcāri)
- 62 ターラカの敵 (tārakārāti)
- 63 美しい目を持つ者 (sudṛś)
- 64 諸方に広まり、知れわたったということ。
- 65 千の光線を持つ者 (sahasrāṃśu)
- 66 大地の主 (kṣitīndra)
- 67 大地の守護者 (bhūpa)
- 68 インド郭公のこと。コーキラ鳥 (kokila) と呼ばれ、鳴き声の美しいことで知られる。
- 69 「耳を汚す声をした (śrutidūṣakanirhṛāda)」という語には「天啓聖典を汚す声をした」というもうひとつの意味があることから分かるように、カラスの群れは仏教徒を指す。すなわち、スタンヴァー王 (= ピカ鳥) が仏教徒たち (= カラスの群れ) と付き合わなければ、称賛されるであろうという意味。
- 70 六神通を備えた者 (ṣaḍabhijñā)
- 71 枝を持つもの (śākhin)
- 72 湖に生えるもの (saroruha)
- 73 ヒンドゥー教の世界観では、地底界には7つの層があり、ナーガなどが住むとされる。ラサータラ (Rasātala) は、それら7つのうちの上から数えて5番目に位置する。Mani 1975 の Pātāla, Rasātala の項目等を参照。
- 74 “budhendra” という語には、インドラを表す「神々の中の最高者」の他に、クマーリラを表す「賢者たちの中の最高者」というもうひとつの意味がある。
- 75 この詩節の “pakṣa” という語は、「主張」と「羽」という二重の意味で用いられている。

- 76 善逝 (sugata)
- 77 大地を支えるもの (dharādhara)
- 78 かつて山々は翼を持ち、自由に空を飛びまわっていたが、大地が不安定となったため、インドラのヴァジュラにより翼を切られたという神話にもとづく。この神話については、上村 2003, pp.51-52 等を参照。
- 79 大地の守護者 (vasudhādhipa)
- 80 大地の主 (dharādhīśa)
- 81 インドの月種に属する王朝の有名な王。1000 年の後、プール (Pūru) に王位を譲って森へ行行って暮らし、死後に天界を獲得したが、ある時、神々の集会にいるインドラやその他の神々、王たちを侮辱したことにより、バランスを崩して地上へと落ちた。Mani 1975 の Yayāti の項目等を参照。
- 82 雲の轟き (ghaṇaghoṣa)
- 83 鶏冠のあるもの (śikhāvala)
- 84 Śivaprasāda Dvivedī のヒンディー語注 pp.29-30 に記されているように、インドの古典においては、願いを叶える如意宝と呼ばれる宝石や、蛇毒を鎮めるマントラなどが見られ、死者を蘇生する薬草に関しても『ラーマヤナ』6.74.33 に見られる。『ラーマヤナ』の記述によれば、カイラーサ山中に薬草の山があり、そこに死者を蘇生する薬草があるという（中村 2013, p.233 を参照）。
- 85 大地の主 (gotreśa)
- 86 大地の神 (bhūśura)
- 87 大地の守護者 (bhūpa)
- 88 大地の神 (bhūdeva)
- 89 空の宝石 (dyumaṇi)
- 90 曲がって進むもの (bhujamga)
- 91 大地の神 (bhūśura)
- 92 蛇の王 (bhogīśa)
- 93 尊い者 (bhagavat)
- 94 大地の神 (bhūśura)
- 95 大地の主 (prthivīpati)
- 96 大地の主 (vasudhādhipa)
- 97 マドゥの敵 (madhudviṣ)
- 98 神々の主 (surādhipa)
- 99 橋 (setu)。『ラーマヤナ』において、ラーマたちがランカー島へ渡るためにナラという猿が橋を架けるが、その出発点が現在のラーメーシュヴァルであるとされることによる。
- 100 雪山 (tuṣārādri)
- 101 プリグの息子 (bhr̥gunandana)
- 102 このエピソードは『マハーバーラタ』第 3 巻 116 章に見られる。苦行者ジャマダグニにはレーヌカーという妻がおり、その妻との間に生まれた 5 番目の息子がラーマであった。ある時、沐浴に出掛けたレーヌカーがチトララタ王を見て、道ならぬ思いを抱いたことに怒ったジャマダグニは、4 人の息子に母親を殺すよう命じた。彼らはそれに従わなかったために呪いをかけられたが、ラーマは斧で母親の頭を切り取って父親を満足させた。そして、満足した父親が願いを叶えてやると言うので、ラーマは母親が生き返ること、母親を殺したことを忘れること、母親殺しの罪に触れないこと、兄弟がもとに戻ることを願ったという。上村 2002, p.326 以下を参照。
- 103 ジナに従う者 (jaina)。ここでは仏教徒を指す。「ジナ (jina)」という語は、かつては様々な思想家に対する敬称として使用されていた。専らジャイナ教の宗教的完成者を指すようになったのは、アーチャーヴィカ教が衰え、仏教がその呼称を放棄して「ブッダ (buddha)」という呼称を好むようになって以降（9 世紀頃）のことと考えられる。この点については、Jaini 1979, p.2, n.3 を参照。
- 104 スカンダ (skanda)
- 105 獣の中の王 (mr̥gendra)
- 106 ジナ (jina)。ここでもブッダを指す。注 103 を参照。

107 火から生まれた者 (jvalanabhū)

108 月を頭頂に持つ者 (candracūḍa)

参考文献

- 金沢篤 1986 「Sāṅkṛṣa-kāṇḍa をめぐる諸問題—Mīmāṃsā 研究序説」、『東洋学報』第67巻第3・4号、pp.(1)-(35)。
- 上村勝彦 2002 『原典訳 マハーバーラタ 3』、ちくま学芸文庫。
2003 『インド神話—マハーバーラタの神々』、ちくま学芸文庫。
- 澤井義次 2016 『シャンカラ派の思想と信仰』、慶應義塾大学出版会。
- 中村了昭 2013 『新訳 ラーマーヤナ 6』(東洋文庫 836)、平凡社。
- 前田専学 1980 『ヴェーダーンタの哲学—シャンカラを中心として—』(サーラ叢書 24)、平楽寺書店。
- 渡瀬信之 1981 「Dharmasūtra において見出される Āśrama 観」、『東海大学紀要 文学部』35 輯、pp.1-18。
- Antarkar, W. R. 2004 *Saṅkṣepa-Śaṅkara-Jaya of Mādhavācārya or Śaṅkara-Digvijaya of Vidyāraṇya Muni*, Post-graduate and Research Department Series No.45, Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- Bader, Jonathan 2000 *Conquest of the Four Quarters—Traditional Accounts of the Life of Śaṅkara*, New Delhi: Aditya Prakashan.
- Jaini, Padmanabh. S. 1979 *The Jaina Path of Purification*, Berkley: University of California Press.
- Mani, Vettam 1975 *Purāṇic Encyclopaedia*, Delhi: Motilal Banarsidass.

(平成 29 年度科学研究費 16K16699 による研究成果の一部)